

図書館が面白くなってきた

マルシェノルド編集主幹 小磯 修二

マルシェノルドで図書館をテーマに取り上げるのは2008年3月号に続き、今回で2回目となる。マルシェノルドの創刊は1999年だが、これまで原則として同じテーマは取り上げてこなかった。しかし、20年目を迎えたことを機に、過去に扱ったテーマも時間経過の中でその役割や意義が変化してきたものについては、新たな視点と問題意識で考察していくこととした。

10年前の公立図書館はややもすれば貸本の施設か、学生の勉強空間として受け止められていた。一方で、地方財政の厳しさなどからそのあり方が見直され、地域の課題解決支援や調査研究の要請に応じていくべきという「役に立つ図書館」を求める流れが出てきた時期でもあった。そこで、マルシェノルドでは「地域と図書館～新しい時代の図書館像を探る～」というテーマで、地域における情報拠点、知の拠点としての図書館の役割を探っていった。

前回の取材で忘れられない出来事があった。それは当時片山善博前知事の指導で積極的な改革を行い、自治体の政策立案支援やビジネス支援に向けてさまざまな挑戦をしていた鳥取県立図書館に出向いたときだった。ちょうど私たちが取材で訪れた際、図書館に地元の若桜^{わかさ}鉄道の存続活用に向けた相談があった。たまたま私が北海道で長く地方鉄道の問題に関わっていたことを担当者が知ると、取材後すぐに若桜町役場に強引に連れていかれ、そこで存続に向けた検討会議に参加させられたのだ。使えるものは使い倒すという理念が徹底しており、これが図書館かと驚かされたが、地域のために奮闘しているスタッフの思いが身をもって伝わってきた貴重な経験であった。

今回は、北海道内の公立図書館にアンケート調査を実施して10年間の変化を分析するとともに、各地の挑戦事例を紹介しながら、進化する図書館の実態を追っていった。この10年間で、さまざまな創意工夫を凝らした取り組みが全国各地で行われるようになった。今回の事例はすべて北海道内の図書館を選んだが、取材先の選定には正直苦勞した。実際の取材でも、これまでの図書館のイメージを超える発想と取り組みに出会うことが多く、驚きの連続であった。事例で紹介したとおり、「働く人が悩んだときに解決のヒントを与えてくれる」（札幌市図書・情報館）「乳幼児向けのデジタル絵本を使ったプログラミング体験」（札幌市えほん図書館）、「勝手にコラボ」（滝川市立図書館）、「ストレスチェック」（幕別町図書館）と、刺激に満ちた楽しい取り組みが各所でなされていた。また、印象的だったのは出会った図書館職員の人たちが、本当に生き生きと楽しく自発的にアイデアを駆使しながら働いている姿であった。10年前に鳥取県で体験した地域のために奮闘する意欲、姿勢が、北海道内の各所でしっかり根付いてきていることを実感することができた。

着実に図書館は面白くなってきている。それを支えているのは、「与えられた仕事を均一にこなす仕事」から「地域のニーズに応えながら創意工夫を活かせる仕事」へという図書館に携わる人々の意識の進化であろう。